

今月のメッセージ (2013年10月)

日本銀行富山事務所長
佐子 裕厚

立山カルデラ

今年の夏は全国各地で豪雨による被害が発生しました。富山県も大雨に見舞われましたが、当県の場合、被害は比較的軽度で済みました。

富山県は自然災害が少ない県と言われていています(2011年の自然災害被害額は1,306百万円で全国第37位です)。ただ、当県の歴史を紐解くと、これは防災に向けた県を挙げた取り組みの賜物であることが解ります。

立山連峰の一角に「立山カルデラ」と言われる崩壊地があります。

幸田文の紀行文(「崩れ」、講談社文庫)にも取り上げられたこのカルデラは、1858年(安政5年)の大地震による大鷲・小鷲山の崩壊によって形成されました。山から崩れ落ちた大量の土砂は常願寺川(カルデラを源流として富山湾に注ぐ川)を一気に下り、富山藩東部一帯に大被害を与えました¹。

1903年(明治39年)富山県は、明治政府の招聘で来日したオランダ人技師ヨハネス・デレケの指導の下で大規模な砂防工事を立山カルデラで開始します。この砂防工事は国の直轄事業となって現在も続いています。砂防事業の一つである白岩砂防えん堤の落差は108メートルもあり日本一の大きさです²。

富山県の水害との戦いは常願寺川のみではありません。デレケに「これは川ではない。滝だ」と言わしめた富山県の急流は県内各地に度々水害をもたらしていたのです。このため、神通川では明治中期から大正初期にかけて大規模な川筋の付け替え工事が行われました(ちなみに富山県庁は旧神通川の埋立地に建っています)。黒部川の上流域には幾重にも砂防ダムが作られました。庄川でも江戸時代に44年の歳月と延べ100万人を超える労力を費やした大堤防が築かれています。保安林の整備も進められ、当県の保安林率(保安林面積÷森林面積)は全国第1位となっています(2010年)。

立山カルデラの底にある六九谷(ろっきゅうだに)に立ち、大鷲・子鷲崩れを初めとする一連の山並みの威容を見上げると、自然の威力の凄まじさと砂防工事に掛けてきた人々の労苦が感じられ、筆舌に尽くせぬ感動を覚えるのです。

以 上

¹ 谷底に建っていた立山温泉は一瞬にして数十メートルの土砂に埋まり、30余名が生き埋めになって死亡したと言われています。今、温泉の跡地には慰霊碑が建っています。

² 今でも崩壊の可能性がある大量の土砂(2億m³、黒部ダムの総貯水量とほぼ同じ)がカルデラ一帯に滞留していると言われています。